

## 質保証システム部会（第 8 回）における定員管理に関する主な意見

### 定員管理の意義・役割

#### （定員管理の意義・役割）

- 質保証の裏側にあるのは、各大学のリソース。リソースと質保証の関係を成り立たせているところに定員の問題が出てくる。そのリソースとは、教員の数や質、教員が教育に割ける時間、施設、通信環境、学生の学びに割ける時間。これらのリソースを質保証につないでいくときに、学修者本位の教育における定員という概念はどう再定義され得るのかということを考える必要がある。
- 学生数や教員数を学部単位で考えるのか、大学単位で考えるのか。学部によってキャンパスが違う場合は、キャンパスごとの考え方に基づいて学生の面倒の見方は変わってくる。その場合、定員を、授業の効率、知識がきちんと伝達できること、学生がちゃんと育つこと、どういうことで考えていったらいいのか。
- 教育の質を高めるためには、教員 1 人当たりの学生の数というのは少ないほうがいい。世界的に見ても、日本の大学の学生数は教員に対して多い。それで、教育の質が担保されていない面がある。あるいは、先生が非常に忙しく、研究の時間を削って教育に對峙しているというような現状。質を担保するためには、社会が急激に変化しても、定員管理をきちんとやらないといけない。

#### （学生と教員の比率の観点）

- 教育の環境確保のために大事になってくるのは ST 比。定員管理も ST 比が大きく異なれば取扱いが異なってくる。ただ、実行可能性を考えると、ST 比の基準値を決めて学生数を制限することはできないので、少人数授業の確保と関連してくる。いかに少人数の授業を確保しているかというような論点も質保証の中に組み込むことが必要ではないか。
- ST 比というより授業規模の話。オンラインでも、双方向性を担保した学びを考えると、質保証をするためには 1 人の先生が教えられる範囲は決まってくる。
- 大学全体で ST 比を測るという考え方があるが、それはもともと教員全体が学生全体を面倒見ているという発想が背景にあるから。教育効果で言えば、個々の授業の ST 比のほうが重要。例えば、科目によって、大人数でもやれる科目、大人数で TA を置くことによって効率的にいく科目、ゼミのように一定数が適正な科目があり、それはその都度大学が教育のシステムとして考えなくてはならない。設置基準等で対応すべきことではない。
- 卒業研究やキャップストーンなどで、学生の卒業に責任を持てる教員と学生の比率が大事なのではないか。ただ単位を積み上げるのではなく、最後に責任を持って学修成果を見ることができる体制になることが重要。

## **定員管理の弾力化・柔軟化**

### **(質保証のための制度と政策手段としての制度)**

- 定員管理には、質保証のための教育環境の確保の話と、もう少し幅広いファンディングやマーケットの話があることを共通認識として持った上で議論したほうがいいのではないか。
- 入学定員と私学助成とのリンクは、制度の問題と政策の問題と分けられる部分もあるのではないか。

### **(弾力化・柔軟化の方向性)**

- 定員管理の弾力化・柔軟化、すなわち、入学定員ベースから収容定員ベースに、単年度から複数年度での管理に、学部・学科単位から大学単位の管理にというふうに移行すること自体には賛成。
- 大学は授業だけで学生を育てているわけではなく、いろんな側面で社会教育している。そこまで含めて大学を考えていかなければならない。

### **(単年度から複数年度の平均へ、入学定員から収容定員に)**

- 学部単位の入学定員から大学単位での収容定員で行うということ、それから、単年度ではなくて複数年度の平均を見ることにしてほしい。
- 入学定員と文科省による私学助成とがリンクされているということが、一番大きな問題。私学としては、学部ごとではなく大学全体で、入学定員ではなく収容定員で評価してほしい。
- 1点刻みの入試からの脱却のため、一番大きな足かせになっている入学定員の厳格な管理を考え直していただきたい。これは大学全体の定員にしても解決される問題ではなく、たくさん入れても、きちんと質の保証をして、出口のところをしっかりとすること以外には、入学定員を質保証と結びつけて1点刻みの入試から脱却するには方法はない。

### **(学部学科単位から大学単位に)**

- 大学における教育は、学部単位ではなく各学部が連携した教育、あるいは、学年横断的な教育へ移行しているので、入学定員だけ学部単位で発想するのはやめ、大学単位にしてほしい。
- 大学全体で定員を管理する場合、教員の専門性の確保は別の論点として挙げる必要がある。
- 学部から大学全体の定員管理にすることを考える場合には、担当する大学教員の専門性をどう保証していくのか、ST比をどう考えるのかといった課題を議論すべき。
- 定員の学部単位から大学単位へというのは、大学運営の柔軟性という意味ではすごくいい。だが、学部間で定員未充足・超過があり、大学全体としては定員通りということ

本当にいいのか。

- 大学単位で定員管理をする場合、定員に対する教員数を考えたとき、学位の質保証とつながるのか。教員をあちこちに異動させられるのであれば十分あり得る。
- 定員管理を大学全体にすると、学科間の定員充足に偏りが出ることも想定されるため、ある程度きめ細かい確認は必要ではないか。全体がちょうど充足していればいいというやり方がまかり通るようになってはいけない。
- 学位プログラムが定員管理の一つの単位になりえるが、学修成果を可視化して質を保証していこうというときに、単位互換の考え方も重要。

### **学生数の算定方法その他**

- 留学生定員を内数にするのか外数にするのか。諸外国における学部定員の取扱いを参考にすると、自国民や在留市民への教育機会の確保のための財政と収容力は確保する一方、より卓越した人材の獲得や教育サービスの輸出のために留学生を受け入れていくという流れもある。留学生について、自己負担を原則に広げてもいいという議論もあり得る。
- 留年者の定員上の取扱いについて、厳格な成績評価・卒業認定の観点や、卒業・入学時期の柔軟化の観点から、定員管理とどう結びつけていくのかを議論すべきではないか。
- マイクロクレデンシャルは、入学していない人たちが高等教育に入ってきているということになるが、定員的にはどう取り扱うのか議論の余地がある。
- 既存の定員の考え方は、リアルのキャンパスベースの大学であればもちろん維持していかなくてはならないし、その中で柔軟性を考える必要があるが、それとは違った形で、新たに付け加えて、オンラインにおける定員を考えていかなければいけないのではないか。ここでの定員は、教育環境の観点で責任を持って面倒を見られる学生数であり、かなり柔軟に考えられるのではないか。
- 物理的な学生の流動性、オンラインで受講する国内外の学生数、その教育の質や単位認定の観点を含めて議論していく必要がある。
- フルタイム学生だけではなく、留学生や、科目履修生のような社会人学生も考慮して、学生の定義を見直す必要が出てくる。